

故郷忘じがたく候



古川 紘一

森永乳業
取締役社長

「坂の上の雲」がドラマ化され、司馬遼太郎の作品が再び耳目を集めている。そこでは、先人達の偉業と高い志が描かれ、多くの人々が感銘を改めて受けた。

● ● ●

ところで、司馬遼太郎が現存する偉人を唯一書かれたのは、「故郷忘じがたく候」の十四代目沈壽官先生だけであるとお聞きする。秀吉の朝鮮出兵の役で、薩摩に朝鮮の陶工たちが拉致され、苦労を重ねながら苗代川（現在は美山）に作陶の地を求め、陶土・釉薬を苦労の末入手し、白薩摩・黒薩摩を完成させ、そして400年以上の間、はるかな故郷・朝鮮の地を想う望郷の念を綴ったのが、「故郷忘じがたく候」の主人公、十四代目沈壽官先生である。

● ● ●

過日、苗代川の地を訪れる機会を得て、その上、幸運にも十四代目の話を伺うことが出来た。その思い出の写真の一枚である。鹿児島市内から東シナ海に向かって車で小1時間で、十四代目の「壽官陶苑」に着き、先生にお会いすることが出来た。



↑ 沈壽官先生より薩摩焼のご説明をいただいた折の写真

● ● ●

先生は、今年で84歳とお聞きしている。先生の深い見識をもったお話と400年の歴史を積み重ねた薩摩焼を目近に触れることが出来た。

● ● ●

先生がふと漏らされたが、陶芸家の生活はなかなか大変で、先代の作品を売りつないで食べた時もあったとのことである。客間でお茶とお菓子を頂戴しながらお話を伺ったが、部屋にさりげなく「篤姫」で重要な役割を果たした小松帯刀の琵琶がそっと置かれていたのが印象的であった。そして、何点かの茶碗などをお分けいただいたが、朝は先生のコーヒークップで美味しいコーヒをいただき、夜は「ぐい呑み」で美味しいお酒をいただくのが至福の時である。薩摩切子でいただく冷酒もよいが、冬は熱燗をこの「ぐい呑み」でいただく少しだけの贅沢を、皆さん、お許しあれ。